

ルーシー・ジョンストン, ルディ・ダロス [編]

坂戸美和子, 大野 裕 [監訳]

ケースフォーミュレーション

——6つの心理学派による事例の見立てと介入

A5判並製・金剛出版

2024年12月刊

定価4,950円(税込)

評者＝草野智洋(琉球大学人文社会学部)



本書はぜひ次のような人に手に取ってもらいたい。

①ケースフォーミュレーションとは認知行動療法学派の人が行うものだと思っている人。②ケースフォーミュレーションとは、個人の内界で相互作用している「認知」「行動」「感情」「身体反応」と、個人の外界の「出来事(状況)」が相互作用しているという「あの図」に情報を入れ込んでいくことだと思っている人。これはいずれも本書を読む前の評者自身でもある。

本書を読むことで、ケースフォーミュレーションに対する評者の認識は劇的に変わった。まず、本書はメインタイトルこそ「ケースフォーミュレーション」という用語が使われているが、本文中のほとんどの箇所では「事例定式化」または「定式化」という訳語が当てられている。そして、本書で述べられている「定式化」とは、ケースにまつわる情報を収集し、整理統合し、治療目標と介入方針の仮説を立て、それをクライアント(またはその関係者)に提示し、話し合い、クライアントの意見を取り入れて修正していくという一連のプロセスのことである。これはもはやセラピーそのものである。少なくとも、初回面接(もしくは最初の数回の面接)で定式化を行って、それから治療面接を始める、というイメージとは全く異なる。

定式化とセラピーが同じと言い切るのがさすがに乱暴であれば、評者は「見立て」という言葉を使いたい。よく見ると本書の副題は「6つの心理学派による事例の見立てと介入」となっており、「見立て」という用語が使われている。本書の中心部分は、同一の架空事例に対して6つの学派がそれぞれの立場から見立てを立てるというもので、いわば『グロリアと3人のセラピスト』の見立て版とも言える。『グロリア』と本書が異なるのは、本書では6つの学派の見立てを提示するだけにとどまらず、それらの統合についても論じられている点である。

統合という観点から、本書で強調されている定式化

(見立て)のポイントを以下に紹介する。これらは、どのような学派のセラピストであっても同意できる内容ではないだろうか。まず、見立てとは固定的なものではなく流動的なもの、常に変化していくプロセスであるという点である。そして、そのプロセスの中心は、セラピストとクライアント(またはその関係者)との治療同盟の確立と強化である。見立てはセラピストが一方的に作成してクライアントに提示するものではなく、クライアントとの協働によって修正を加えながら作り上げられていくものである。見立てを立てるにあたっては、セラピストの「省察性」(自分自身の価値観や信念に対する気づきと考察)が重要である。

全文で400ページ近くある本書は、見立てを立てることやセラピーを行うということに関して、数多くの視点を提示してくれる。どんな学派のどんなセラピストが読んでも、自分に抜けていた視点や、自分が十分に注意を向けていなかった視点が見つかるだろう。それらを取り入れていくことによって、セラピストとしてより成長することが期待できる。

- 原書: Johnstone L & Dallos R (Eds) (2020) Formulation in Psychology and Psychotherapy : Making Sense of People's Problems. Second Edition. Routledge.